古文 読解の重要知識 まる見え1枚シート

点が動く読み解きの「型」を厳選。ここを見たら勝ち。設問は「文法の型」を知っているかで差がつきます。重要な順に並べたので、上から覚えれば実戦で効きます。

★★★ 入試超頻出　★★ よく出る　★ 余裕があれば　💡 覚え方　▶ 例文

① 助詞「ば」 ▶ ② 係り結び ▶ ③ 主語の交代 ▶ ④〜⑥ 敬語（方向・最高・給ふ） ▶ ⑦以降 細かい識別・読みで詰める

※ 上から順に身につけるのがおすすめ。前半（①〜⑥）で「誰が・何を・どう言ったか」と敬語による人物関係をつかみ、後半は設問でよく問われる細かい識別・読みの仕上げ。

読む順：左の列を上から順に ▶ 終わったら 右の列へ（見出しの番号が順番です）

1 助詞「ば」— 未然＋ば＝仮定／已然＋ば＝確定

読解で最初に効く知識。直前の活用形を見るだけで意味が決まります。「もし〜なら」か「〜ので・〜と」かで訳が真逆になります。

形	接続	意味	訳し方	頻出
未然形＋ば	未然形	仮定条件	もし〜なら／〜たら（＝if）	★★★
已然形＋ば	已然形	確定条件	〜ので／〜すると（＝because）	★★★

💡 未然形＋ば＝if（もし〜なら）／已然形＋ば＝because（〜ので）。直前がア段（未然）なら仮定、エ段（已然）なら確定。

💡 古文で「もし〜なら（if＝仮定）」になる形は3つ：① 未然形＋ば ／ ② 未然形＋「ず」＋は（〜ずは＝もし〜ないなら）／ ③「む」＋係助詞（〜むは・〜むに＝もし〜なら）。

▶ 例文：花咲かば（未然）→「もし花が咲いたら」(if)／ 花咲けば（已然）→「花が咲くので」(because)

2 係り結び — ぞ・なむ・や・か→連体形／こそ→已然形

文中に係助詞があると、文末の活用形が変化します。文末を探す目印になり、訳の調子（強調・疑問・反語）も決まります。

係助詞	結び（文末）	意味	頻出
ぞ・なむ	連体形	強調（訳には出さなくてよい）	★★★
や・か	連体形	疑問「〜か」／反語「〜だろうか、いや〜ない」	★★★
こそ	已然形	強調（やや強い）	★★★

💡 「や・か」＝疑問文の目印／「こそ＋已然形」＝逆接／「もぞ・もこそ」＝危惧。
① 古文に「？」はないので、文中・文末の「や・か」は疑問・反語のサイン（〜か？／〜だろうか、いや〜ない）。
② 「こそ」＋已然形でいったん切れず下に文が続くと逆接（〜だが・〜けれど）。
③ 「もぞ・もこそ」は危惧「〜すると困る・大変だ」（例：雨もぞ降る＝降ったら困る／人もこそ見れ＝見られたら大変だ）。

▶ 例文：花こそめでたけれ（已然） →「花こそすばらしい」

▶ 反語の例：誰か知らむ（連体） →「誰が知ろうか、いや誰も知らない」

3 主語の見分け — 接続助詞で交代するか見抜く

古文は主語が省略されます。直前の接続助詞で「同じ人が続くか／別人に替わるか」を判断するのが最大のコツ。

主語そのまま（同一）

- て（〜して）
- して（〜して）
- つつ（〜しながら）

同じ人物の動作が続く合図。

主語が変わりやすい

- を（〜のに・〜ところ）
- に（〜と・〜ので）
- が（〜が・〜のに）
- ど・ども（〜けれど）
- ば（〜ので・〜たら）

ここで別人に視点が移ることが多い（必ず替わるわけではない。あくまで「替わりやすい合図」として確認する）。

💡 「て・して・つつ は続く／を・に・が・ど・ば は替わる」。替わる側は頭文字で「をにがどば」とまとめて暗唱。

▶ 例文：（帝、女を）見てうつくしと思す →「て」なので主語は帝のまま。／（帝、女を）召しければ、（女）参りぬ →「ば」で主語が女に交代。

4 敬語の方向 — 尊敬は動作主／謙譲は受け手／丁寧は聞き手

敬語は「誰を高めているか」で人物関係が読めます。種類を見分ければ、主語や目的語の特定にも直結します。

種類	高める相手	代表語	訳	頻出
尊敬	動作をする人	給ふ・おはす・おはします・のたまふ・召す	〜なさる／お〜になる	★★★
謙譲	動作を受ける人	奉る（たてまつる）・聞こゆ・参る・申す	〜し申し上げる／お〜する	★★★
丁寧	聞き手・読み手	侍り・候ふ（さぶらふ）	〜です・〜ます・〜ございます	★★

💡 「尊敬＝する人、謙譲＝される人、丁寧＝聞く人」。謙譲があれば必ず「動作の受け手＝高めるべき人」がいる、と逆算できる。

▶ 例文：（臣下が帝に）文を奉る → 謙譲。受け手の帝を高める＝「帝に手紙を差し上げる」。

5 二重敬語＋絶対敬語 — せ給ふ＝最高位／奏す・啓す＝相手が固定

尊敬の助動詞「す・さす・しむ」＋尊敬語「給ふ」を重ねた形。敬意が二重なので、対象は天皇・皇后・上皇クラスなど最高位に限られるのが原則です。主語当ての強力なヒント。

形	読み解き	頻出
せ給ふ／させ給ふ	最高敬語。主語は天皇・中宮など最高位の人物	★★★
しめ給ふ	「しむ＋給ふ」。漢文訓読系の文章で最高位を表すことが多い	★★

💡 「せ・させ＋給ふ が並んだら、ほぼ天皇か中宮」。ただし「せ給ふ」は「使役＋給ふ（〜させなさる）」のこともあるので、文脈で使役か最高敬語か見分ける。

▶ 例文：帝、いみじう笑はせ給ふ →「帝がたいそうお笑いになる」。主語＝帝と確定できる。

絶対敬語　受け手が必ず決まっている謙譲語

語	必ずこの相手に「申し上げる」	頻出
奏す	天皇・上皇（院）に申し上げる	★★
啓す	中宮・皇太子（東宮）に申し上げる	★★

💡 「奏す＝天皇へ、啓す＝中宮・東宮へ」。相手が固定なので、出てきたら受け手の人物が即わかる（主語当ての強力ヒント）。

6 給ふ — 見たら99%「尊敬（〜なさる）」

「給ふ」は活用で意味が変わるが、実際に出るのはほぼ尊敬。見たらまず「〜なさる」を当てる。

形	意味・正体	頻出
四段「給ふ」	尊敬の補助動詞「〜なさる・お〜になる」(圧倒的多数)	★★★
下二段「給ふ」	謙譲「〜ております」。自分が〈思ふ・見る・聞く・知る〉に付き、会話文に出るときだけ＝まれ	★
四段の本動詞	「お与えになる」。これもまれ	★

💡 「たまふ」と見たら99%尊敬の補助動詞（〜なさる）。下二段謙譲を疑うのは〈思ひ給ふ・見給ふ・聞き給ふ・知り給ふ〉が会話文に出たときだけ。

7 ⑥「にや・にか（あらむ）」— 〜であろうか（疑問・推量）

断定「なり」の連用形「に」＋係助詞「や・か」＋（省略された）「あらむ」。「〜だろうか」と訳す定番の省略表現で、多くは筆者・語り手の心の中の疑問・推量（心情）を表します。

形	正体	訳	頻出
〜にや（あらむ）	断定「に」＋や＋あらむ	〜であろうか	★★
〜にか（あらむ）	断定「に」＋か＋あらむ	〜であろうか	★★
〜にこそ（あらめ）	断定「に」＋こそ＋あらめ	〜であるのだろう	★★

💡 「にや・にか の下に『あらむ』を補えば意味が通る」。文末で「にや。」「にか。」と切れていたら、心の中の疑問「〜だろうか」。

▶ 例文：物の怪にやあらむ →「物の怪であろうか」

8 和歌の修辞 — 掛詞・縁語・枕詞・序詞・本歌取り

和歌の設問は「技法を指摘できるか」で決まります。5つを押さえれば取りこぼしません。

修辞	働き	例・特徴	頻出
掛詞	一語に二つの意味を重ねる	「まつ」＝松・待つ／「あき」＝秋・飽き	★★★
縁語	関連語を散りばめ連想を作る	糸・張る・乱る・絶ゆ（糸の縁語）	★★
枕詞	特定語を導く主に5音の飾り（訳さない）	あしひきの→山／ちはやぶる→神	★★★
序詞	ある語を導く前置き（多く7音以上・訳す）	具体的な景から本題の語へ導く	★★
本歌取り	有名な古歌を踏まえて詠む	元歌を知っていることが前提	★

💡 「枕詞は多く5音で訳さない／序詞は多く7音以上で訳す」。掛詞はひらがな表記の語が怪しい（同音で二意）。

▶ 例文（掛詞）：花の色はうつりにけりな…「ながめ」＝「眺め」と「長雨」を掛ける（小野小町の歌）。

9 文中の「む」「べし」— む＝婉曲・仮定／べし＝強い推量・当然

「む」「べし」は文末か文中かで意味が変わります。文中（連体形で名詞に続く）の「む」は婉曲・仮定になりやすい。

む（文末→文中）

- 基本は推量・意志（will）「〜だろう／〜しよう」
- む＋体言（連体形で名詞に続く）＝婉曲「〜ような」(英語の like＋名詞)
- む＋係助詞（〜むに・〜むは）＝仮定「もし〜なら」
- 適当・勧誘はほとんど出ない

「〜む人」「〜むこと」は婉曲。

べし

- 推量（強い）「〜にちがいない」
- 当然・義務「〜べきだ・はずだ」
- 意志「〜しよう」／可能「〜できる」／命令「〜せよ」

「む」より強く確信・必然のニュアンス。

💡 む＝主観的な推量・意志／べし＝客観的・根拠のある推量。「む の下に名詞→婉曲」。べしの意味は「スイカ止め（推量・意志・可能・当然・命令）」で覚える。

▶ 例文：言はむ方なし →「言いようがない」(婉曲)。／ 行くべき道 →「行くべき（当然の）道」。

10 呼応（陳述）の副詞 — 下の打消・禁止とセット

特定の副詞は、文末の打消・禁止とセットで意味が決まる。副詞を見たら下を探す。

副詞	下に来る語	意味	頻出
え〜	打消（ず・じ等）	〜できない（不可能）	★★★
な〜そ	間に動詞の連用形	〜するな（禁止）	★★
つゆ・さらに・たえて〜	打消	まったく〜ない	★★
をさを さ〜	打消	ほとんど〜ない	★

💡 副詞を見たら文末の打消・禁止を探す。「え＋打消＝できない」「な〜そ＝するな」「つゆ・さらに＋打消＝まったく〜ない」。セットで覚える。

▶ 例文：え言はず → 言うことができない（不可能）。／ な散りそ → 散ってくれるな（禁止）。

11 死・出家の婉曲表現 — 直接書かず遠回しに言う

古文では「死」や「出家」を直接書かず、遠回しに表します。これを知らないと文脈を読み違えます。下の死の表現は、おもに「亡くなる」の意になり得ます。

表現	意味（おもに＝死ぬ）	頻出
かくる（隠る）	お隠れになる＝（高貴な人が）亡くなる	★★★
はかなくなる	あっけなく亡くなる	★★
むなしくなる	（亡骸だけになり）亡くなる	★★
いふかひなくなる	言うかいもない状態になる＝亡くなる	★★
失す（うす）／消ゆ	いなくなる・消える＝亡くなる	★★

💡 「隠れる・はかない・むなしい・言うかいない＝みんな死」。これらが出たら、人物が亡くなった場面を疑う（「失す・消ゆ」は文字どおり消える意のこともあるので文脈で判断）。

▶ 例文：中宮、つひにかくれさせ給ひぬ →「中宮はとうとうお亡くなりになった」。

出家を表す表現

表現	意味（＝出家する）	頻出
世を捨つ・世を背く・世を遁る（のがる）	俗世を離れる＝出家する	★★
さま（様）を変ふ・かたちを変ふ	姿を変える＝出家する	★★
髪をおろす・御ぐし（みぐし）おろす・やつす	剃髪して出家する	★★

💡 「世を捨つ・さまを変ふ・髪をおろす＝出家」。死と同じく直接言わない。文脈で「死」か「出家」かを見分ける。